

BFSニュースレター

発行者 びとうファイナンシャルサービス株式会社(BFS)

2010年4月1日発行

Vol.11, 第11号

このニュースレターの主な掲載情報:

- グローバルな政治・経済、マーケットの最新情報や分析見通し
- BFSのサービス、実際のトピックス、ケーススタディ
- 資産運用や人生設計に役立つ情報
- 知っておくと得するホットな情報

外国株は外債より為替リスクがずっと少ない！！

皆さんは、外国に投資する際に、株より債券の方が安全と思っているでしょうし、株も債券も、同じ通貨であれば為替リスクは同じと思っていることでしょう。

ところが、為替が株と債券に与える影響は大きく違います。このあたりを覚えておくと、皆さんの資産運用の成果が、長い間に大きく変わることもなるでしょう。

株式の場合、為替リスクは投資対象の株式市場のリスクよりずっと少ない(およそ半分)といわれています。一方債券の場合、為替リスクは投資対象の債券市場のリスクよりずっと大きい(およそ2倍程度)といわれています。

この背景を少し説明しましょう。為替は、短期では為替市場の投機的売買や需給関係で動きますが、長期では2つの国のインフレ率の差によって決まるとされています。相対的にインフレの国の通貨は安くなります。一方、株式はこのインフレによる通貨安(たとえばドル安、円高)を埋めようとする動きをします。インフレになると、株式や物、不動産などの価格が上がるからです。インフレによってその国の通貨が安くなった分は、インフレによる価格上昇(株価上昇)で相殺されるということです。

さらに株式の場合、為替損は投資先企業の業績拡大によっても埋

め合わせられます。インフレによる商品の値上げの一方で、賃金の上昇は遅れ気味になり、利益率が改善するからです。

この動きは、1990年代前半のブラジルに見られます。1993年当時2500%にも及んだインフレの時、投資資金が実物資産に殺到し、ブラジル・ボベスパ株価指数は、1993年4月の240から1994年9月には54,840まで暴騰しました。この上昇幅は、ハイパー・インフレを補って余りあるものだったといわれています。



一方、債券は実物資産である株式(企業の一部)と違い、いわゆるペーパーマネーで、インフレの影響をまともに受けます。

インフレになれば通貨安になり金利は上昇する、金利が上昇すれば債券の価格は下がる。つまり株式と違い債券の価格は、通貨安を相殺する方向に動かずさらに増幅させるように動くのです。外債投資の場合、債券価格の下落と通貨安のダブルパンチを食うことになるのです。

これが、債券の場合、為替リスクは投資対象の債券市場のリスクよりずっと大きい(およそ2倍程度)といわれる背景です。

新興國中流層が企業競争の主戦場に

グローバル企業の最重要マーケットはBricsなど新興国の中流層になっています。

国連世界人口推計では、現在68億人の総人口の内、今後10年間でBrics人口が8.2%増えるのに対し、先進7カ国は4.4%増(日本はマイナス3.5%)にとどまります。新興国の増える人口は都市化を進展させ、消費市場を拡大します。

IBMでは2050年までに世界人口の70%が都市部に住むようになり、2030年までに20億人が中流層になると見えています。

中国の都市部人口は毎年1000万人超で拡大していて5年後には米国人口(3億人)を超えるといわれています。中国のGDPに占める消費の比率は4割程度ですが、今後中流層の増加により先進国やブラジル並みの6割程度への拡大が見込まれ、消費による内需拡大、持続的な経済成長の段階に入ってくると予想されます。

ブラジルは2008年に始めて中流層が50%を超え、人口2億人の国民の購買力が大幅に高まっていて、現在は資源輸出より個人消費の推進力が経済成長に大きく寄与する形になっています。

コカコーラ、P&G、ネスレなどグローバル企業の焦点はみな、ここに向かっています。今後10~20年のグローバル競争の主戦場は、新興国の中流層と見て、間違いのないでしょう。

今月の言葉:

仕事の圧迫は心にとってきわめてありがたいものだ。その重荷から解放されると、心は一段と自由に遊び、生活を楽しむ。仕事をせずのにんびりしている人間ほど惨めな物はない。そんな人はどんなに美しい天分もいとわしく感じる。ーゲーテ



・BFSのミッションは、お客様とパートナーになり、正しく客観的なプランニングとお客様資産の運用を通じて、お客様を人生のゴール達成に導くことです。

・BFSは、金融機関とは完全に独立して、お客様利益最優先の公正なアドバイスを提供しています。

・BFSは、最新で高度な理論や知識、30年以上のグローバルな豊富な経験、強い倫理観で最高品質のサービスを提供しています。

・資産運用サービスやライフプランニング、BFSについてもっと詳しく知りたい方は、左記までお問合せください。

Web サイトもご覧ください
<http://www.bfsc.jp>

発行者 びとうファイナンシャルサービス株式会社(BFS)

代表取締役 尾藤 峰男

〒164-0003

東京都中野区東中野4-7-18

岡藤ビル303号

電話 : 03-5338-9733

携帯 : 090-4934-3121

FAX: 03-5338-9734

電子メール : info@bfsc.jp

お客様の人生に豊かさを、心に安心とゆとりを—BFSの大切な役割



自分の思考形成に役に立つ、効率のいい「新聞の読み方」

毎日大事な時間を割いて読む新聞、その新聞の読み方は、自分の情報収集や思考形成の上でも重要です。時間の節約という意味でも大変かけがいのないテクニックになるでしょう。そこで「新聞の読み方」と題して、お話ししましょう。

・**漫然と読まず、読む記事を主体的に選ぶ**
40ページ以上の記事を隅から隅まで読んでいたら、大変です。「自分の関心のある記事のみ読む」ことをはっきりさせておくことが重要です。「読めば、何でも勉強になる」と思って新聞を読んだら、何も吸収されず自分独自の思考は形成されません。

新聞を読む目的は、「自分がほしい情報」を得る情報収集活動と捉えたらいいでしょう。

・**見出しと冒頭の要約で多くの記事が十分**
そもそも人間の記憶力は限られていますから、記事本文に書かれている内容まで覚えておくことは不可能です。記者が記事を書く時も、要約部分だけで内容を把握できるように書いています。自分の関心が強い記事だけ本文まで読めばいいのです。時間の節約を考えれば、それが大変効率的です。

・**内容のある記事を書く記者の記事を読む**
記者の署名記事を読む場合、「この記者はなかなか中味の濃い記事を書くなあー。」と感じる記者がいます。こういう記事は、自分の思考形成にあって、そもそも相性のいい記事なのです。特定の記者の記事を読むということも一つの方法です。

反面、スペースを埋めるために書かれているような記事も多くあります。何回読んでも頭に入っていない記事などは、もともと中味のない記事が自分の思考形成には役に立たない相性の悪い記事なのです。

・**記者や評論家の予測記事は読まない**
そもそも予測記事ほどあてにならないものはありません。予測を元に行動したら、大変な目にあいます。超悲観的なこともあれば、当たり障りなく書いたり、わざとぼやかしていることもあります。

・**書評記事は毒にも薬にもならない**
新聞の書評を読んでその本を読みたいと思うことは稀です。酷評もできないし、激賞もしにくいところなのでしょう。